



BeOne True report

染毛剤によるアレルギーが増加！化粧品皮膚炎患者の、なんと11%にまで上昇している。

患者を増やしている犯人ともいってよきアレルギー、それが染毛剤に使用されているPPD-A（パラフェニレンジアミン）だというのがです。

平田先生は、PPD-Aが直接的に皮膚への付着によって起こる接触性皮膚炎を第1の危険とし、次にそれよりも怖い第2の危険、さらには第3の危険まで存在する指摘します。3つの危険とは次のようものです。

【第1の危険】
PPD-A（パラフェニレンジアミン）が直接皮膚に触れることにより、かぶれや発疹などの接触性皮膚炎を起す。



平田先生の講演は終始OHPを使い、ヘアダイの危険性をとてもわかりやすく説明してくれる。写真：大阪府守口市美容組合員向けに行われた平田医師の講演会の様子。

このように、危険な化学物質を毎日取り扱っているのが理美容室だということ。そして、アレルギーの原因で、年間1万人もの理美容師を目指す若者が辞めていく事実がある。医学界で大問題になっている、染毛剤によるアレルギーが、現在、我が国の職業病のワーストだということを、オーナーはもちろんスタッフも、まずは認識していただきたいと思えます。

ぜひ一度、講演会で平田医師の話聞かれ、事実を知ってください。そして、解決方法があることも知っていただきたいのです。

我が国の職業病のワースト1

また、美容師さんが使うゴム手袋に含まれる老化防止剤が、問題のPPD-Aと基本構造がよく似ているため、アレルギー症状を起こす場合があるといえます。即刻「プラスチック製手袋に変えるべきだ」と、平田医師は忠告します。衣類も同様に注意が必要だといえます。

一方、植物染料なら安心という考えの人も多いようですが、原料に植物以外のPPD-Aが混入されている事実は、一般の人にはほとんど知られていないことも指摘します。施術をする側の理美容師さんですら、そのことを知らない人も多いようです。

医学界で大問題が起きてくる!!



【第2の危険】
施術中にPPD-Aが飛沫となって漂ったものを吸い込むことの危険性。それは有害な薬剤が血中に入り全身に回ることで血液味し、体のどの部位に皮膚障害が起きてもお不思議はない状況がある。

【第3の危険】
体内に入ったPPD-Aによって免疫システムが働き、PPD-Aを体が「記憶」してしまう。PPD-Aによるアレルギーはまず一生治らない。さらに、PPD-Aに類似した化学物質によっても、アレルギーを引き起こす可能性が高まる。

BeOne True report

医師が語る衝撃の事実!! 危険なヘアダイアレルギー



● 黒い髪の人を探す方が苦労するほど、老若男女を問わず茶髪ブームが続いている。しかし、茶髪にするための染毛剤によるアレルギーや皮膚障害が増し、医学界でも大問題になっているといふ。だがそのことを知る消費者は少ない。

● そんななか、その事実を伝えるために全国を回って講演を続けている医師がいる。
その医師は危険な染毛剤の実態を知りしめてくれると同時に、これからの理美容業界の方向性を、医師という立場から示唆してくれている。

医師という立場から、染毛剤に警鐘を鳴らすのは、東京都港区南青山の平田肛門科医院院長の平田雅彦先生です。

平田先生は、いま、医学界で大問題になっている染毛剤の危険性について、一人でも多くの美容師さんたちから、正しく理解してもらい、お客様の健康はもちろんだこと、自らの健康のことも考えていただきたいと、講演会を通じて話されています。

アレルギーの真犯人はPPD-A

平田先生によれば、1970年代には化粧品によるアレルギーが多く、化粧品皮膚炎の患者の70%を占めていた当時、染毛剤によるアレルギーは

わずか1%だった。その後、旧厚生省の通達や企業の自主規制などにより、化粧品皮膚炎は98年には、ほぼ5%程度にまで減少し、改善が見られた。ところがその反面、染毛剤によるアレルギーは増加を続け、化粧品皮膚炎患者の、なんと11%にまで上昇しているといえます。短期間にここまで皮膚炎



平田雅彦さんプロフィール

1953年東京都生まれ。1981年筑波大学医学部卒業。1982年慶応義塾大学医学部科学教室に入局し一般外科を研修。1985年社会保険中央総合病院大腸肛門病センターに入り、大腸肛門病の専門医としての豊富な経験を積む。
現在は1935年開院の平田肛門科医院3代目院長として、患者さんが本来持つ自然治癒力を最大限に引き出す治療を中心としている。日本大腸肛門病学会の肛門領域の指導医。



新版「痔」
平田雅彦 著
主婦の友社
¥1,470

